# 竹田市（たけた）

（大分県）

## 蓄積された文化的土壌を基盤にした地域振興
## 幕開けは市民協働で構想した総合文化ホールの竣工

### 新竹田ルネサンスの幕開け《グランツたけた》

竹田市は2005年4月、旧竹田市・荻町・久住町・直入町の1市3町の合併により、新市としてのスタートを切った。

2009年4月に就任後、今年（2019年）4月で丸10年目（3期）の節目を迎える首藤勝次市長を訪問したのは2018年10月下旬のこと。錦秋直前の竹田市は、名湯・長湯（直入地区）の特徴である世界有数の炭酸泉のごとく、内側から気泡がこんこんと湧き出てくるような活気に満ちていた。

その背景にはまず、昨年10月7日にオープンしたばかりの竹田市総合文化ホール《グランツたけた》の存在があった。九州北部に甚大な被害をもたらした「平成24年九州北部豪雨災害」によって、1976（昭和51）年の開館以来、約40年間も親しまれてきた旧竹田市文化会館が閉鎖。その復活は官民を挙げての悲願だった。

「今から800年以上前に最初に築城され、豊臣秀吉の時代から徳川幕藩体制初期に掛けて完成した、岡城の城下町として発展してきた竹田の地は、例えば南画の巨匠・田能村竹田（1777～1835年）を輩出し、竹田に一時期暮らしていた音楽家・瀧廉太郎が岡城をイメージして名曲『荒城の月』を生んだ事例もあるなど、市民文化の土壌が歴史的に、深く蓄積されてきたまちといえます。

旧竹田市文化会館は、そうした文化的土壌を継承してきた竹田市民にとって、芸術・文化の鑑賞の場である以上に、自分たちの市民活動・生涯学習の拠点として機能しました。同時に文化会館も市民に育てられ、まちの発展に寄与する《場》として、非常に大切な存在になっていました。それだけに被災による閉鎖は衝撃的でした。

それから6年の歳月を掛け、市民協働で基本構想から将来の活用法までを議論してきた新文化ホールが、《グランツたけた》という従来にも増して素晴らしい機能を持つ文化的拠点として完成したことは、大げさでなく、市民には地域の誇りやアイデンティティを取り戻したかのような、格別の喜びがあるのだと思います」

首藤市長はさらに、「《グランツたけた》の完成を「新竹田ルネサンスの幕開け、象徴」とも表現する。ちなみにグランツとは、

首藤勝次（しゅとうかつじ）
竹田市長

ドイツ語の「輝く」という意味の言葉で、ルネサンスとはご承知のように「文化の再生・復活」を意味する。

「九州北部豪雨災害のあった２０１２年は、実は現在に至る竹田の地の基礎を築いた岡藩初代藩主・中川秀成公の没年から４００年の節目でした。そのため被災直後ではありましたが、あえて予定通りに『岡藩城下町４００年祭』を開催。式典の席上において、私は『この災害を負の遺産とせず、市民一丸となって乗り越え、先人たちから受け継いできた地域遺伝子の力とともに、希望に満ちた新たな第一歩を踏み出す、新竹田ルネサンスの第一歩としよう』と宣言させていただきました。被災・閉鎖した文化ホールを再生・復活させた《グランツたけた》の完成は、まさにそのシンボルなのです」

「全日本高等学校声楽コンクール」の模様（グランツたけた）

橋マニア注目の6連アーチ・灌漑用水用水道橋（明正井路）

新築落成式の翌日、昨年10月8日の「さだまさしコンサート」をこけら落としに、《グランツたけた》は一流アーティストによる演劇に、コンサートに、文化講演会に、さらには市民活動に、スケジュールは既に目白押しの状態だ。

また取材（10月24日）直前の10月19日～21日には、声楽を学ぶ全国高校生の甲子園ともされ、72回目という歴史を誇る恒例「瀧廉太郎記念　全日本高等学校声楽コンクール」も開催されている。

まちじゅうに活気が満ちていたように感じられた理由は、ほかにもたくさんある。

## 世界が注目する竹田式湯治と岡城跡

例えば復活・再生したのは《グランツたけ

平成24年九州北部豪雨災害の復興事業「竹の子ひろば」

た》だけではない。２０１２年７月の九州北部豪雨災害と、２０１６年４月の熊本大分地震により、使用不能になっていた竹田市体育センターも、昨年10月５日、リニューアルオープンを迎えた。

また１９８８（昭和63）年に、旧直入町の長湯温泉が「日本一の炭酸泉」と専門研究機関から認定されてから、２０１８年は丸30年の節目だった。そして日本一の炭酸泉の認定を契機に、ドイツの最先端温泉療養法を取り入れるべく、直入町はドイツのバードクロッィンゲン市と姉妹都市提携する。それをけん引したのは、旧直入町職員時代の首藤市長だった。

この取り組みはやがて、現在の「竹田式湯治」へと結実していく。ウォーキングや食と温泉を組み合わせた湯治の新たな形で、６カ月の間に市内の指定宿泊施設に３泊以上滞在する人には各種の特典が付くパスポートが発行される。パスポートには市内の宿泊施設や温泉施設を利用し、ウォーキング体験などをするたびにスタンプがもらえる。その内容を所定の書類に記入し、申請すると給付金が受けられる仕組みだ。

こうした取り組みが軌道に乗りつつある現在、竹田市では湯治の新たなシンボル施設として50ｍの歩き湯を備え、宿泊施設やレストラン棟も併設した「クアハウス」を建設している（２０１８年11月半ば現在）。温泉棟は既に完成しており、残りの施設も今年度中には完成の予定だ。

また現在の竹田式湯治のシンボル施設、直入地区の長湯温泉療養文化館「御前湯」も10月に開館20周年を迎えた。オープン以来毎年10万人超の入浴客を集め、20年間で計２３０万人が利用した。

竹田市の活気と元気の素はさらにある。城下町としての竹田を形成した岡城跡は、国際的な旅行口コミサイト《トリップアドバイザー》が主催する「旅好きが選ぶ！　日本の城

竹田式湯治の中心施設「長湯温泉療養文化館・御前湯」

温泉新時代のシンボルである完成間近の「クアハウス」

ランキング２０１８」において総合５位に輝き、城跡だけに限れば１位にランクされたのだ。

「岡城跡よりも上にランクされたのは、姫路城、二条城、松本城、松山城で、すべて世界遺産や国宝などに指定されている建造物付きのお城ばかり」（首藤市長）だ。石垣だけの岡城跡がいかに城郭マニアの支持を集めているかが分かる。

その理由は実際に現地に足を運んでみれば納得されるだろう。雄大で緻密な石垣が輪郭を飾る広大な城跡は、絶景ともいうべき眺望に周囲を囲まれており、山城から平城へと変

世界中の城マニアが注目する「岡城跡」

遷する独特の魅力に満ちあふれている。

その岡城跡のふもとに展開する旧城下町のたたずまいがまた、見事な町割りを往時のままに残している。中でもＪＲ豊肥線・豊後竹田駅前から稲葉川を渡ってすぐの古町通りは、観光客にも人気の飲食店などが多い通りだが、その途中にある「竹田キリシタン研究所・資料館」と至近の位置にある祭壇付きのキリシタンホールは独自の趣きとなっている。

竹田市内に残る隠れキリシタン文化を紹介する施設として、２０１７年10月下旬にオープンしたもので、研究所・資料館には岡城に縁のある中川神社で発見された国指定重文の「サンチャゴの鐘」（サンチャゴ病院１６１２の刻印がある）のレプリカや、民家から発見

「隠しキリシタン」の研究拠点・竹田キリシタン研究所・資料館

された聖母マリア像など、貴重な遺物が豊富に展示され、キリシタンホールには新旧の大量のイコンが展示されている。

「従来の言い方では隠れキリシタンですが、竹田の場合、キリシタン信仰が始まったころの地域の実力者・大友宗麟自身がキリシタン大名でしたから、豊臣秀吉の禁教令の際にも国ぐるみで信仰を続けていたという経緯があります。そのため隠れキリシタンではなく、領主が隠していたということから《隠しキリシタン》と呼んでいます」

竹田市では前述の岡藩城下町４００年祭を契機に、埋もれていた竹田キリシタンの歴史を『竹田市の施策』として掘り起こすとともに、新たな観光資源にもするべく、研究所・資料館を設立したのだという。

本格的な研究が始まってまだ日も浅いため、さまざまな謎が残されているそうだが、首藤市長は「その謎があるからこそ想像力の翼を広げることができるし、さまざまな仮説も立てられることから論争も起こりやすく、面白い素材だと考えている」と語る。

## 個性的取り組みを オーガナイズする新生ビジョン

一つずつ挙げていけばキリもないが、竹田市を活気づけるこうした個々の取り組みに加え、取材に訪れた10月下旬はちょうど、10月６日～11月25日まで大分県全域で開催されて

2017年開館「竹田市立図書館」のルーツは1909年設立の竹田文庫

いる「第33回国民文化祭・おおいた２０１８」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」の真最中。竹田市では国民文化祭「竹田ルネサンス２０１８」と銘打ち、各種のイベントが行われていた。ただでさえ多様な文化活動が日常的に盛んな竹田市では、そのため、より一層の活気や熱気が渦巻いていたのかもしれない。

それにしても、竹田市の地域活性化、地域振興にまつわる各種の取り組みは実に多彩というしかない。しかも、これまでご紹介してきたように、それらの取り組みは皆、関連付けられつつ、相乗効果を発揮しているように見受けられる。

それは竹田市で現在進められている各種の取り組みが、古くから行われてきたものも含め、２０１５年に策定された《新生ビジョン》によって交通整理され、見事にオーガナイズされているからだろう。

竹田市の《新生ビジョン》は、「人口ビジョン」と「創生総合戦略」を包含した地域振興ビジョンだが、特徴的なのは「ＴＯＰ運動による地域新生」という副題が付いていることだ。Ｔは「竹田」と「トライ」、Ｏは「オリジナル」と「オンリーワン」、Ｐは「プロジェクト」と「パワー」の各頭文字なのだ。「目標がなければチャンスが見えない、ビジョンがなければ決断ができない」という首藤市長のモットーをスローガンに、人口減少をはじめとする各種の地域課題に対するオリジナルかつオンリーワンの具体的な施策・企画が示され、その遂行が力強く促されている。

「ＴＯＰ運動による竹田市新生ビジョンの推進源は《地域力》《人間力》《経営力》《行政力》です。市政運営で最も重要なのは政策立案能力です。国に任せていても地域振興は望めない。であるならば自分たちで独自の政策を立案し、自らの力で時代を切り開いていくしかない。そのための人材も育成し、世界に通用するような価値を提供していかなければいけない。

例えば《竹田式湯治》の推進や《グランツたけた》の存在そのもの、《岡城跡》の発信や《隠しキリシタン》の研究なども、そうした流れを推進する施策といえます」

竹田市が現在推進している《農村回帰宣言》《農村商社わかば》《エコミュージアム構想》《竹田総合学院＝ＴＳＧ構想》などの施策・事業も、その一環である。

このうち《農村回帰宣言》は、少子高齢化や過疎化を克服するために、空き家や放棄された耕作地などを逆に活用しようとする施策だ。企業誘致や地場産業の振興と並行して、都会をリタイアしたいと考える団塊の世代や、豊かな自然環境の中で子育てをしたいと考えている働き盛り世代の移住・定住を、農

市内各所のしだれ桜は春の風物詩

村環境を整え直すことで受け入れようとするものだ。

《農村商社わかば》は竹田市で生産された特産品のブランド化・流通販路拡大を目的とし、竹田市の出資で設立された一般社団法人。農村回帰で移住・定住した人々にも力強いバックアッパーになる。

《竹田総合学院＝ＴＳＧ》は、竹田市に埋もれた歴史・文化の再発見、竹田に根付いた人材育成・起業・就業支援の２本柱にて事業を展開。農村回帰宣言で移住・定住した工芸家などの雇用創出も目指す。

## 創出したチャンスを適正なビジョンで具現化

農村回帰宣言に関連する施策と併せ、竹田市では農村の活性化および農業振興を全般的に図るため、昨年８月30日、東京農業大学と「農業振興や地域づくり等に相互に協力し合う」ことを目的とする包括連携協定を締結した。それに先駆けて８月23日から８日間、東京農大国際バイオビジネス学科の学生10人が竹田市内で実地研修を行っている。

「竹田市の農業の最大の課題は後継者不足ですが、鳥獣害対策や６次製品化などもこれから積極的に進めていかなければなりません。そうした部分で豊富な経験と実績のある東京農大との連携は非常に心強く思っています。何よりも若い学生たちとの交流を通じ、若い感性がいろいろな意味で、竹田市の農業によい影響を与えてくれるものと期待しています」

折しもこのリポートをまとめている最中に、竹田市と竹田市観光ツーリズム協会が竹田式湯治のバリエーション事業として開発した、温泉と自然散策を組み合わせたツアーが、ヘルスツーリズム認証委員会から「ヘルスツーリズム認証」を受けたというニュースが入った（11月14日付け）。

ヘルスツーリズム認証は２０１８年に発足したばかりだが、同委員会によれば「健康への気づきの促進」「情緒的価値の提供」「安全安心への配慮」の３項目を審査。２０１８年は第１期分として全国で実施されている17のプログラムが認証された。温泉地が集中する九州地区で唯一認証されたのは竹田市だけだという。

今も遺る戦国時代以来の城下町の遺構

「竹田式湯治のキャッチフレーズは《笑・食・歩・温》で、このツアーの参加者は長湯温泉の御前湯で健康状態をチェックした後、長湯ダム周辺を散策し、森林浴や飲泉体験をした後に、有機食材を使ったヘルシーな料理を味わっていただきます。竹田式湯治の心《笑・食・歩・温》を、そのままツアー化したものといえます」

観光カリスマとしても知られる首藤市長。推進する市政は新生ビジョンのスローガンと同様、今後も「目標設定でチャンスを創出、適正なビジョンに基づき決断する」ことで、着々と結実化されていくに違いない。

（取材・文＝遠藤 隆／取材日 ２０１８年10月24日）

「名水の里・竹田」竹田湧水群（写真は河宇田湧水）